

還暦記念ヨーロッパ旅行記 古城守一

目次

準備 準備！

四月二十三日(土)	曇り 一日目	1
四月二十四日(日)	快晴 二日目	1
四月二十五日(月)	快晴 三日目	3
四月二十六日(火)	曇り 四日目	3
四月二十七日(水)	快晴 五日目	4
四月二十八日(木)	快晴 六日目	5
四月二十九日(金)	快晴 七日目	5
四月三十日(土)	快晴 八日目	6
五月一日(日)	快晴 九日目	6
五月二日(月)	快晴 十日目	7
五月三日(火)	快晴 十一日目	8
五月四日(水)	曇り 十二日目	8

準備 準備！

平成六年三月後半、私は各旅行社から取寄せたカタログを見ながら、各社に片っ端から電話をかけたままくっついていた。

翌月に還暦を迎えるので、家内と記念旅行をしようと思つた。外パツクツアーを懸命に探していたのである。おりからの円高メリットを追い風に、空前の海外旅行ラッシュで、何処も満員で断られた。四月末から五月初旬のゴールデンウィークにかけての超繁忙期の十日余の旅行パツクを、直前になって探し求めるのは、あまりにも世間知らずだと言われたが、なんとかしたい一心で、キャンセル待ちでよいからと、無理やり希望コースを幾つか申し込んだ。

早くから計画すれば良いのであるが、仕事の関係です

前にならないと予定がはつきりしないのが、サラリーマンの悲しい運命で致し方がなかった。日頃の心掛けが良かったのか、広い世の中には拾ってくれる神もあったたのか、それから暫くしてJTB（日本交通公社）のツアーコード七八〇『エレガントヨーロッパ・ロマンチックドイツとスイスアルプス・パリ十二日間の旅』という長い名称のパツクツアーを手に入れた。

会社に休暇取得申請を出して、ようやく四月末から五月初めにかけての有給休暇の許可を得た。出発まで日がないので旅行代金の支払いをはじめ、諸手続きに慌ただしい日々を送った。私も家内も数年前に旅券を取っていたので、旅券取得手続きの煩わしさだけは逃れられた。

今回の還暦記念ヨーロッパ旅行をふり返ると、なぜか幸運の女神が微笑みかけるチャンスが何度もあった。殆ど諦めていた、このパツクツアーを得たのが、まず『幸運その一』で、これからの幸運の始まりになった。

私は満六十才到達の日の属する平成六年四月の月末をもつて定年となるので、会社の幹部との定年者慰労宴会に出席した翌日の四月二十三日(土)、家内と共に待望の十二日間の海外旅行に出かける事になった。

家内は、勿論海外旅行は初体験であった。

四月二十三日(土)曇り 一日目

私は神奈川県大和市在住であるが、成田空港には正午集合の比較的ゆつくりしたスケジュールであったので、横

浜線經由JR 横浜駅から成田エクスプレスを利用し、空港で予め送っておいた渡航用トランクを受取り、第一旅客ターミナルビル南ウイング四階H 特設団体カウンターが集会場所へ臨んだ。私達の参加ツアーの最終旅行構成人員は、団体と呼ぶにはあまりにも少人数の十二名で、新婚三組、OL三人組、母娘一組、それに最高年齢の私達の旧婚一組という極めて家族的なグループであった。このパツクツアーの所定人数枠からすれば、遙かに少ない最少催行人数ぎりぎりの構成であったに違いない。主催者側には申し訳ないが、私達にとっては極少人数という、非常に恵まれた環境が与えられ、『幸運その二』が早くも訪れたのである。

出発前のオリエンテーションや手続処理を見ていて、この添乗員は前職が日航社員とかの、とてもウイットに富んだベテランらしい気配りのよい女性で、今回の旅が楽しくとても素晴らしいものになるであろうことを予感させた。旅のしおり、コースガイド、全員お揃いのJTB 旅物語・オズの携行用パツジ、ボールペンなどを渡され、全員旅券を預けて、注意事項の説明を受けた。

自分達で最初にしなければならないのは、出国カードの記入だけであった。食にはとても敏感な私は、添乗員のオリエンテーションの中でこのツアーの朝食はコンチネンタルではなく、概ねバイキング・スタイルを予定しているとの一言を本能的に聞き逃さなかった。これこそ『幸運その三』ではないか。

私は仕事の関係で来日中のドイツ人とも交流があり、日本人からみたら、ヨーロッパ人は、毎日どんなにまずい食事をしているかを耳にタコが出来る程聞かされていたからである。新東京国際空港旅客施設使用料大人一人当たり二千円を支払ったら、日本円の世界とは当分お別れである。

出国手続を終って搭乗前に、デュティフリー・ショップ

で旅行中の晩酌用のウイスキーを買った。私ことの海外旅行は始めてであるが、仕事では何回か経験しており、通関後に晩酌用のウイスキーを買うのは、コスト・ミニマムを狙う私の常套手段であった。

ルフトハンザ・ドイツ航空機は成田空港発十四時五分の直行便で、飛行中は歩き回ったり、飲んだり、食べたり、眠ったり、喋ったり、なるべく変化をもたせたが、十数時間はずっと退屈の限界であった。シベリア上空では眼下に壮大な氷の海が眺められ、機内のテレビ・ディスプレイではヨーロッパ地図上に飛行軌跡が時折表示されるのは興味深かった。このディスプレイには飛行中のローカル地域の地図と世界全体の地図が交互に表示されるので、今現在の状態が把握でき安心につながった。

私の隣に、座席を八三出しそうな屈強で大柄な外人がいたので、下手な英語と筆談でコミュニケーションを試みしてみた。彼も英語は余りうまくなかったが、ザグレブから来たクロアチア人で三十二歳、職業を聞いたらノコギリで木を切ると言っからキコリではないか。彼は地域紛争最中のクロアチアに比べ、日本は平和で安全な国だから羨ましいと言っていた。

フランクフルト空港での入国手続きを済ませると早速チップや枕銭用の小銭を作ることにした。取り敢えず五千円を七五・五ドイツマルクに交換した。レートは六六・二三円であった。

成田を出て十数時間、機内で既に一晩明かして来たような気分が現地時間の午後八時頃、宿舎のフランクフルト・コンティネンタルに投宿した。機内で夕食を済ませていたが、JTBの計らいで部屋にサントイッチャフルツの差し入れがあり、シャワーを浴びた後、この差し入れを着に家内とドイツ・ビールで無事の到着を乾杯し、晩酌のウイスキーの水割りを楽しんだ。

翌朝はすぐ出発できる様に荷作りの段取りを済ませてから寝た。私達夫婦は、二人でサムソナイトの渡航用中型トランク一個と手荷物だけの軽装であったので、荷解き、荷造りは比較的容易で機動性に富んでいた。

四月二十四日(日) 快晴 二日

モーニングコール六時、バイキングスタイル朝食六時半荷物回収七時、ホテル出発八時十五分のスケジュールであったが、私は早朝から家内とホテル近隣を散歩しながら、スナップ写真を取ったりして過ごした。私は出勤時刻が早いので、日本では家内と早朝に散歩することは、先ず有得ないから不思議なものだ。この様な行動が可能などころに、人生六十一年の節目である今回の旅の大きな意義があるのかも知れない。何といってもここは、生まれて始めてのヨーロッパであり、夫婦共々日本とは大いに異なる周囲の風景にやっと外国に来たことを実感した。

早朝のせいか行き交う人も見当たらず、静寂な川岸の青桐の木立ちの中を散歩した。私ここで来ているのに、メイン川対岸のビルにAEGの看板を見付けると、ヨーロッパの大電機メーカーのアルゲマイネ・エレクトロシエ・ゲゼルシャフトがあるのかと思ったりして、つい娑婆婆がでてしまつた。ホテルへ帰って六時半に朝食を取った。チェックアウト



ホテル近くの民家



AEG本社ビル

を済ませて、これから数日間利用することになる専用大型バスでライン川へ向った。我々の荷物も一緒にバスの中に収納して同時に移動するので安心して旅行を楽しめる。

五十人乗りの専用大型バスに十三名しかいないのだから二人座席に一人座つてもまだガラガラで、車内は極めてゆつたりしていて快適だった。車内は空調は勿論、テレビ・トイレ付き、クーラー収納の原価販売の飲物付きで、更に外貨交換も随意に扱ってくれて非常に便利であった。

今回の旅行は色々な国をまわり、通貨も多様に変わるので、トラベラーズチェックを初め一切外貨を買わず、買物はクレジット・カードで処理することに決めており、現金は必要最小限のいわゆる小銭程度の円貨しか持つてこなかった。したがって専用バスがまるで走る外為銀行の役目してくれたのは、大助かりであった。

アウトバーンでの大型バスの高速疾走の小気味良さ、それに周りの珍しい風景を楽しみながらライン川・クルーズの乗船基地であるリューデスハイムの町に到着した。

しばらくつぐみ横丁(ケロッセル・ガッセ)近辺で色々な土産店やドイツ独特の珍しい家並を見物してからクルーズに乗船した。出船直後、進行右手に広大なブドウ畑のなだらかな斜面が広がり、その丘の奥の森の方に巨大な女神ゲルマニアの銅像(一八八三年)が聳えていた。内陸水路の交通量では世界一を誇るだけあって、ライン川は思ったよりも大きな川で、行き交う様々な船も数多く、船体も相当大きなものであった。

山の傾斜面に聳える数多くのバラエティある形状をした古城や教会の塔などは、いにしえからライン川を見下ろしつつ、そこに存在した様々な時代の歴史的事実を見て来たのであろうと、想いを馳せた。エーレンフェルス(名譽の

とりでの意、一二二一年）城跡、ラインシュタイン城（一〇〇〇年）、ゾーネック城（十一世紀）、中洲にある船型のプファルツ城を過ぎて、ローレライの岩を進行方向右手に見てからしばらくして、ライン川・クルーズも乗船後約二時間の行程を終り、ザンクトゴアハウゼンで下船して昼食を取った。



プファルツ城

私達夫婦はワインを嗜んだが、ツアー料金に含まれない飲み物代などの費用については添乗員が集金してまとめて支払った。

午後は再びバスでハイデルベルグへ向い午後三時半頃到着し、ハイデルベルグ城内を見物。ハイデルベルグ城廃墟前での記念写真撮影やドイツワインの試飲をした後、大学を中心としたハイデルベルグ市内やネッカー川に十八世紀に架けられた、この街で最古の石造りの古い橋（アルテ・ブリュッケ）を見物した。



アルテ・ブリュッケ

モーニングコール七時半、朝食・荷物回収八時半、チェックアウトを済ませ、ホテル出発九時半のスケジュールであったが、早朝から家内と古い橋（アルテ・ブリュッケ）

を渡って対岸へ行った。

民家の橙色の屋根、岸辺の鬱蒼とした木立ちと芝生の緑、それに水際で餌を啄む白鳥の色彩の取り合せは、まるで絵葉書のような風景で、スナップに収めたのは勿論である。



ネッカー川の白鳥

街から丘を登って『哲学者の道』を散策したが、道の突き当たりにはハイデルベルグ大学哲学科の表示のある建物があった。

チェックアウトを済ませ、九時半にホテルを出発、古城街道を通過してローテンブルグへ向った。自分の名字が街道の名前になっているのは何とも妙な気分だ。ネッカー川の上流で小休止の際、予め添乗員から言われていた通り朝食のパンを持って来て、水際の白鳥や鴨にやりながら、沢山集まって来るのを楽しんだ。このパンを川や湖の野鳥にやりながら、しばしの憩いを取る場面が、今回の旅でこれから後、何度か訪れる事になる。このような場面は日本では殆ど見かけないが、とても気持ちよくなごませてくれる。専用バスの運転手はサッカーのラモス選手に似た大男で、途中道を間違えるハプニングもあった。

古城街道はその名の通り、山の斜面の至るところに数多くの古城が聳えており一種独特な風景を楽しむ事が出来た。正午頃ローテンブルグの宿舎のアイゼンフット前に到着。チェックインして荷物が部屋に運ばれたのを確認して昼食に出かけた。午後は城壁で囲まれ中世都市の面影をとどめたローテンブルグ市街を散策した。市街中心部のマルクト広場、市庁舎、聖ヤコブ教会（十四世紀頃の建造）の十七米高さのステンドグラス、市街を取り巻く木造の城壁の

中の散策など、いにしえをしのぶのには、十分過ぎるたらずまいであった。城門外の公園と思しきところにはチューリップが咲き乱れていた。

宿舎のアイゼンフットはローテンブルグ有数の名門ホテルだそうで、手入れの行き届いた古い家具調度品類が保存された古式豊かな建屋内部に居ると、まるで中世を旅している様な気分になった。

この日の夕食の際、突然嬉しいハプニングが起きた。この四月二十五日は、私が満六十歳になった還暦記念の誕生日であったが、夕食開始直前に添乗員からJTBの名においてドイツ・フランケンワイン、ケーキ、花束をプレゼントしますと言われ、同行の仲間全員からも祝福を受けた。

海外旅行中に誕生日が到来し、しかも血縁でない大勢の人達に祝ってもらったという偶然、生涯でこんなに感激した幸せな瞬間はいまだかつてなく、還暦記念旅行に相応しい、一生忘れられない『幸運その四』を与えて下さった神に心底感謝した次第である。



還暦記念誕生日

四月二十六日（火）曇り 四日

朝からドンヨリして、今にも降りそうな天気である夕方方の様に暗い。モーニングコール七時、荷物回収・朝食八時、ホテル出発九時でロマンティック街道経由ミュンヘンへ向った。専用バスは昨日までとは別のものになっていた。午前十時頃、中世の姿のままの形で保存されたディンケンシュピールの街で、小休止兼観光をした。ここでは小雨が

降っていて肌寒かった。再びバスに乗り、正午少し前、アウグスブルグ市内へ入って来たが、街の一角で自分の仕事で関係のあったドイツの世界的な複合大企業であるMAN社のロゴマークを車中から発見した。

十二時半頃街中心部のアウグスブルグ市庁舎の前に到着した。この市庁舎の地下のレストランでビールを飲みながら昼食を取った。この地下レストランには市庁舎の時計塔の駆動機構部があり何とも古色蒼然とした、たまたまいであつた。昼食後しばらくは自由行動でアウグスブルグ市内でショッピングを楽しみ、その後再び車中へ戻った。

アウグスブルグを出て二時間程でミュンヘン市内へ入り、雨のニンフェンブルグ城を見物した。十七世紀から十八世紀にかけて建てられたバイエルン王家の夏の離宮の由だが、広大な美しい庭園と宮殿は見ごたえがあつた。その後、郊外の宿舎ミュンヘン・ペンタ・ホテルに服装を解いた。添乗員が午後ひとときを地下鉄を利用して市の中心部へ行って自由行動しないかと提案してきたので早速同調することにした。



ニンフェンブルグ城

ドイツに来て地下鉄に乗ることなど考えてもいなかったので交通システムの違いには興味を引かれた。マリエン広場や古式豊かな旧市庁舎のあたりを散策して、とある街角の一杯飲み屋で家内とソーセージを齧りながらビールのジョッキを空けた。

この夜の夕食はホテルではなく、街のビア・レストランへ繰り出して、飲み放題のミュンヘンビールの大ジョッキを何杯も空け、ドイツ料理とドイツ音楽を気の行くまで楽しんで午後九時半頃ホテルに帰着した。

四月二十七日(水) 快晴 五日目

今日は専用バスでドイツ、オーストリー、リヒテンシュタイン、スイスと四国に跨がって、旅行行程が長いので早く出発することになった。モーニングコール五時半、荷物回収・朝食六時半、ホテル出発七時半であつた。天候快晴で絶好の旅行日和の中、専用バスに揺られること約一時間、ロマンティック街道観光言われ、バイエルンの美



ノイシュバンシュタイン城

の起点とも終点ともしい自然に囲まれた牧歌的な地域にあるホーエンシュヴァンガウの山の麓に着いた。ここはアルプスにも近い所である。

馬車に揺られながら山の上にあるノイシュヴァンシュタイン城(一八六九年から、十七年の歳月をかけて建造)の山門に着いた。この城はドイツを代表する美しい城で、幻想的で華麗なその姿を一目見よつと、毎年世界中から多くの旅行者が訪れるといつ。

城内の王の寝室や歌人の間の壁画、調度品は目を引くものばかりで、城外の風景も断崖絶壁の上からの眺望はまさしく絶景であつた。日本語の説明案内テープが流れていたのは、日本人



ノイシュバンシュタイン城内

もこんな所まで大勢繰り出して来ているのかと半ば呆れ、半ば感心した。

下りは徒歩でバスまで戻り、湖近くのアルペン・ブリッ

クで昼食を済ませた。再びバスに乗り、五日滞在したドイツに別れを告げ、オーストリーを通過してリヒテンシュタインに着いた。

EU(欧州連合)内は出入国通関手続は、一切不要との事であるが、リヒテンシュタインだけは、唯一旅券に記念の通過証明印を押印してくれた。リヒテンシュタインからスイスへ入り、午後六時過ぎ頃、スイス・ルツェルン州の州都ルツェルンの山の中腹にある宿舎のホテル・シャトウ・ギュツチに着き、ゆづに十時間以上の長いバス旅は終わった。

宿泊予定のホテルが変更され、グレードの高いバックツァーのホテルを回されることもあるとかで、このホテル・シャトウ・ギュツチは、そのケースに相当した、名門のホテルであつた。私達は、『幸運その五』に遭遇したことになる。このホテルの庭には、なんと手入れの行き届いた、いにしえの本物の大砲が飾ってあつた。夕食は一応正装で出席することを要請された。

四月二十八日(木) 快晴 六日目

昨日に比べると今日はゆっくりできる。モーニングコール八時、荷物回収九時、ホテル出発十時半、朝食は七時から十時まで取ればよい。年を取ると早起きが習慣になっておりこの日も早朝からルツェルン市内を散歩することにした。ホテルの裏側の急な斜面に自動発着式のケーブルカーがあり、ホテル宿泊人は無料で利用できた。このケーブルカーに乗ると長い山道を短絡してすぐ町中へ至る。

降りたすぐの所にスパーマーケットがあつたので一本一・二五スイス・フラン(約百円)と安いミネラルウォーターの一リットル入りボトルを買った。ミネラルウォーターのエイピアンやピツテルはガス封入ではないので飲み易い。

ヨーロッパでは水も有料なので私達はもっぱらスーパーで安いのを買うことにした。

ルツエルン湖から市内を横断する様に水量が豊富と言いか、流れの早いロイス川があり、雪解水なのか、凄く冷たい水であった。そのロイス川の上にカベル橋が架かっている。これは十四世紀に完成したという屋根付きの木橋で、屋根裏の梁に百余りの板絵が飾られており、ルツエルンの象徴と言われている。火災に遭ったため、今の橋は復元後のものになっていた。

橋の中ほどに八角形の『水の塔』がある。このカベル橋は切手の絵にも、チヨコレートの絵柄にもなっていた。この橋のあたりから見た山の中腹にある私達の宿舎ホテル・シャトウ・ギユッチは白色で優雅なお城というたまたまいで、山の緑と調和していつぶくの絵になる構図であった。

チエックアウトをしてから専用バスで旧市街、ライオン記念碑、ルツエルン湖畔を周遊して、スイスのほぼ中央に位置するベルナー・オーバーランド地方のグリンデルワルトへ向った。午後三時頃に、雄大なユングフラウ（標高四一五八米）、メンヒ（標高四〇九九米）、アイガー（標高二九七〇米）等の有名なアルプス連山が目前に聳え立つグリンデルワルト（この地名はケルト語で『岩と森』の意味）に到着した。

標高五六六米のインタラーケン（この町はトゥーン湖とブリエンツ湖の間に位置し、ラテン語で『湖の間』の意味）が、アルプスの麓とすれば、標高一〇三四米のグリンデルワルトは、中腹の感じである。グリンデルワルトの街から少し離れた宿舎のアイガーブリックは、受け付けや食堂のある本館、ロツジ風のレストラン、本館から五十米程離れた山の方にある宿舎専用のエレベーター付き高層ロツジの三つからなっている。

荷降ろしをしてから、グリンデルワルト駅近くの商店街

を散歩し、例によってスーパーでミネラルウォーターを仕込んだ。この日の夕食は、ホテルのロツジ風のレストランで、四人ないし五人のグループに分かれて卓を囲み、スイスの名物のチーズ・フォンジユに舌ツズミを打った。

四月二十九日(金) 快晴 七目

モーニングコール八時、朝食七時、ホテル出発九時四十分、今晚また泊まるので荷物の回収はなく、安らかな気分だ。早朝の太陽が昇る前後のアルプスの氷の山々は、時の経過につれてピンクからオレンジへと色彩が変化し、やがて日光に映えて銀色に輝き、紺碧の空とのコントラストでも眩しかった。

空気は綺麗で本当に清々しい朝を迎えて、命の洗濯とはこの様なものだろうなとつくづく思った。今日は高山遠足のため厚着して、帽子とサングラスを持って、九時四十分ホテルを出発して駅まで歩いた。周囲が緑のグリンデルワルト駅から登山電車に乗る頃には、太陽に当てられて汗ばむ程であったが、電車が動き出し高度が急速に増して行くくと、風景も緑から白雪、更に氷へと変化し気温も急激に下降した。やがて雪が積もったクライネ・シャイデック駅（標高二〇六一米）に着き、午前十一時頃に早めの朝食を済ませた。

クライネ・シャイデック駅を出発した登山電車は更に高度を上げ、山をくり抜いたトンネルの中を上の方へ登って行く。途中のアイガーヴァント駅（標高一八六五米）でホームの窓越しにグリンデルワルトの緑の谷間を見て、更に上のアイスメール駅（標高三一六〇米）で氷河が崩れて行く様子を眺め、最終駅のユングフラウヨツホ（標高三四五四米でユングフラウの肩の部分に相当する駅）に到着したのが午後一時頃であった。

ここから更にエレベーターでスフィンクス展望台（標高三五七三米）へ登り、アルプスの眺望を堪能した後、再びユングフラウヨツホへ降りて、氷河をくり抜いた展示室の『氷の宮殿』見学、更に大雪原へ出て、赤十字のスイスの国旗が立つた付近を散策し、万年雪やヨーロッパ最長のアレツチ氷河を眺望した。ユングフラウヨツホには、ヨーロッパで最も高い場所の郵便局があり、添乗員に言われて予め準備してきた自分宛ての絵葉書を投函した。帰宅したら記念の消印が施された葉書が既に配達されていた。

よくよく考えてみると、地上で三千米をこえるような高所に来たことは、自分の生涯でも初めての経験であった。

しかもこの様な凄い場所に何の苦勞もせずに短時間で容易に到達できるのは驚きだ。とにかく丸一日アルプス・オンパレードで疲れたが、これも高山のためであろうか。

午後四時頃グリンデルワルトの宿舎アイガーブリックに帰着した時はさすがにグッタリしていた。シャワーを浴びて呑んだビールは酔いの早かったこと。今回のツアー仲間のうち新婚のカップル一組が、朝から別のアルプス登山コースへ出かけて行ったが夕食時に帰って来ず、海外ではあるし何か事故にでも巻き込まれたのではないかと皆で心配した。団体行動はいつもそうだが、自分以外の人に迷惑を掛ける事だけは、絶対慎むべきだ。結局は無事に帰って来たので、皆で安堵の胸をなでおろし、この旅で始めて同一場所で一泊したスイス・グリンデルワルトの夜は静かに更けて行った。

四月三十日(土) 快晴 八目

モーニングコール六時半、荷物の回収七時半、ホテル出発八時半、専用バスは一路ジュネーヴへ向う。十一時頃、レマン湖が見えてきた所で大通りから外れて湖畔近くのシ

ヨン城を観光することになった。

レマン湖はスイスとフランスに跨がるアルプス地域最大の東西に長い三日月形の湖で、長さが約七二キロ米、南北最大幅が約一四キロ米、水深三二〇米、北側にはジュラ山脈がひかえ、南と東はアルプスに囲まれている。湖の北側はスイス領で、国際都市のジュネーヴ、また国際オリンピック委員会（IOC）本部が置かれて、この辺の文化の中心でもあるローザンヌ、さらにジャズフェスティバルで有名なモントルーの街等がある。陽当たりの良い南向きの斜面ではブドウ栽培が盛んで上質な白ワインの産地になっている。南側のフランス領にはミネラルウォーターや温泉リゾートで知られたエビヤンの街などがある。

シヨン（CHILLON）城は、モントルーの街から車で十分程の所に位置し、レマン湖の中の岩島の上に建てられ、自然のお堀りに囲まれており、アルプス連峰とレマン湖と背後の傾斜面の緑に映えるこの城は何とも美しい姿で、絵画的なたたずまいであった。かのヴィクトルユーゴは、この城を『岩塊の上の塔の塊』と表現しているが、そんな感じであった。もとは九世紀頃、古代ローマの遺跡の上に建てられたイタリアに抜ける街道監視用の『関所』で、後世になって牢獄や処刑場としても使用された。

十六世紀頃新教を導入しようとして旧教徒の君主に捕らえられこの城の地下牢に幽閉されたという、ジュネーブの修道院長ボニヴァールの史実にもとずいて、イギリスの詩人バイロンが十九世紀に叙事詩『シヨンの囚人』を書いて有名になったそつである。

城内の暗い地下牢は床が凹凸のある岩鑿の地肌がむき出していて、動物園のライオンの檻の床を思わせた。柱にはバイロンが自ら刻んだという名前（一八一六年）が残っていた。シヨン城は、その華麗な外観に比べて城内は暗く、古代の鎧兜に槍刀が陳列され、何ともおぞましい場所との

印象だが、たった一つだけ幸福の椅子というのがあったので、これからの幸運を祈念し、家内と記念のツーショットを撮ってもらった。

大通りを隔てたシヨン城近くのレストランでシヨン城を眺めながら昼食を済ませた。

午後はレマン湖に沿ってジュネーヴへ入った。ジュネーヴ大学構内の宗教改革記念碑、オービープ公園、花時計のあるイギリス庭園などを散策した。レマン湖畔では、例によつて朝ホテルから仕込んで来たパンを撒いたら白鳥、鴨それに真っ黒い鵜まで寄つてきて賑やかであった。自分の餌に寄つて来る鴨を追つ払う鵜がいれば、逆に鵜を追つ払う鴨もいて、力関係の上下はよく判らなかつたが、図体の大きい白鳥は、彼等の争いに無関心という風情でユツタリと構えていた。

ジュネーヴの宿舎は五つ星のル・プレジデントで、ここも夕食は正装を要請された。夕食して午後八時過ぎに近くの公園を散歩したが、夜には程遠い明るさであった。

五月二日(日) 快晴 九日

今日はヨーロッパに来て始めて、鉄道でジュネーヴから花都パリへ行くのである。モーニングコール五時四十五分、荷物回収六時十五分、朝食六時半、ホテル出発七時でジュネーヴ駅へ向かつた。列車が出るまでの時間を利用して駅で持ち金のスイス・フランをフランス・フランに、又円貨も両替した。一フランス・フランが十九・三九円後後のパリより交換レートはよくなかつた。

午前七時四十五分ジュネーヴ発TGVは、東海道新幹線より振動が大きい感じであつたが、菜の花が一面満開の風景にみとれていたので苦にならなかつた。三時間半程でパリ駅に到着した。

添乗員から、パリはスリだの窃盗だの犯罪が多いから、持ち物には十分注意するよう、くどい程言われたのでシヨルターバッグは前方に抱える様にした。花都パリの噂には程遠く、パリ駅周辺は汚い所であつた。昼直前になつており、リュクサンブール公園を見てから、日本料理レストランに行つた。私達が日本を離れて九日経つており、そろそろ日本食が恋しい頃ではないかとのJTBの配慮があつたのかも知れないが、海外での日本料理は西洋料理に飽きた場合はともかく、余り歓迎したものではなかつた。

昼食後、ノートルダム寺院、シャンゼリゼー通り、エッフェル塔、凱旋門、コンコルド広場などを観光した。ノートルダム寺院近くの外貨交換所では、一フランス・フランが十八・九四円でジュネーヴより交換レートは良かつた。エッフェル塔の前で私達夫婦は年齢合計が百歳以上というこつで、塔を背景に大きな記念写真を撮影してくれ、ホテルに帰つた時にプレゼントされたが、この写真はなかなか見栄えがあり、とてもよい土産になった。オペラ座近くの日本人向け土産免税店三軒ものぞいたが、あまり興味はなかつた。

明日は終日自由行動であり、添乗員からパリ市内の地下鉄の乗り方を教えて貰つた。宿舎は凱旋門からグラント・アルメ通りを北西へ行つた所にあり、ブローニユの森を眼下に見下ろすコンコルド・ラファイエット・ホテルである。旅装を解いて暫く休息して、夕食まで時間があつたので、家内とホテルの中を探訪することにした。

このホテルは大規模で、多くの有名店があつたが、私と家内はケーキの旨そうな喫茶店に入った。本場のチーズケーキとカフェオーレを満喫して七八フランス・フラン（約千五百円）であつた。店内で私達のテーブルの近くにいた白人の老夫が話しかけてきた。多分フランス語と思われたが、何を言っているのかこちらはサツパリ分からず、その

うちあきらめた様であった。

夕食は正装抜きのレストランでよく、メインは、名物のエスカルゴ料理であった。私は台湾生まれで、食用カタツムリにはヘキエキしており、類似の巻き貝には弱いので、今回の旅で唯一苦手な食事に出くわしたわけである。

エスカルゴ料理以外にも、いろいろな料理が出たので、エスカルゴを食べなくても、支障はなかった。

全員そろつての夕食も今晚が最後になるので、JTBからワイン飲み放題のサービスが振る舞われ、我々は、十分堪能した。

五月三日(月)快晴 十日

今回のツアーで、唯一の自由行動の日で、終日パリ市内を楽しむ。一応モーニングコール七時半、朝食七時から十時になっていたが、例によって早起きして朝食を済ませた。折角パリに来たので、ベルサイユ宮殿の参観を望んだが、毎年五月一日と毎週月曜日は休館日になっており、今回はこれが重なる形で何とも間が悪く、ここだけは幸運の女神の微笑みが得られなかった。今まで沢山の幸運に恵まれてたから致し方ないとあきらめた。

そこで今日は、地下鉄を利用してルーヴル美術館をメインに見学してオペラ座、免税店、シャンゼリゼー通り、凱旋門を散策するという大雑把な計画を立てた。今晚はオペラシヨナルツアーのセーヌ川デイクルーズを申し込んだので、夕方までには宿舎に帰着しなければならぬ。

セーヌ川デイクルーズは、一旦日本で申込んでから取り消したが、こちらで確認したところ未だ空きがあるとのことであった。しかし、当日申込でなく一日前迄の申込なら受け付けるとの事だったので、早速昨日添乗員経由で申込んだがキャッシュの持ち合わせがなく代金も立替払いし

てもらった。今日JCBプラザ・パリでキャッシングして精算することにした。日本では代金一人二万円が、当地パリでは約一万八千円弱で済んだから、私の円高メリット作戦は正解であったと思う。

ルーヴル美術館見学は、代金が一人当たり三八〇フランス・フラン(七九二円)の半日コースのオブシヨナルツアーがあつたが、敢えて単独行動の地下鉄コースを選んだ。因みに、昼食代を別にすると私達夫婦の交通費・観覧料は地下鉄二五、ルーヴル美術館八〇、ルーヴル美術館紹介本代六〇、オペラ座二二〇で、二人合せて二八五フランス・フランであつた。コンコルド・ラファイエット・ホテルに直接連絡している地下鉄ポルト・マイヨール駅からルーヴル美術館最寄りの駅へ行った。出口を間違えたせいかちよつと遠回りして、初めは美術館の入り口が何処か判らずウロウロしてしまつた。

ルーヴル美術館は、巨大な建物で私の様な素人でも知っている、レオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザの微笑やミロのヴィーナスなどの実物を初め、陳列物も多種、多様に多量である。絵画、彫刻など六部門に分れ、展示総数は三十万点を超えるとのことである。それこそ半日で見られる範囲は物理的に限られてしまつた。館内は上り・下りが多く、遠足より重労働で入館して三時間もたつてないのに、顎を出してしまい最寄りのソファアに座り込んでしまつた。

これだと一日中回つてもどのくらい参観出来るか、体力的にも自信がない。観覧専用の車椅子が何かがあれば便利ではないだろうか。館内では、あちらこちらに若い画家が絵画を模写している光景が目をついたが、あれは特別な資格ないし許可証があるのだろうか。興味ある素人にも門戸を開いてくれれば、写生でもするのになと思つたりした。

疲れたので早めに昼食を取る事にした。

美術館内の方が手取り早いと考え、ルーヴル・レストランに入った。オブシヨナル・ツアー費用を節約した分、昼食には思い切つて投資することにし、美味そつなメニューとワインを選んだ。コース・ランチ三四〇、白ワインポトル九五、コーヒ一十四、ティー十五の合計四六四フランス・フラン(約九千円)はJCBカードで支払つた。このルーヴル・レストランは日本人の客あしらいがたくみで、フランス語が出来なくても食事をするのに苦労はなかつた。

同じ館内でもファミリーレストランの方は混雑していたがルーヴル・レストランは高級なのが、そんなに混んでなく静かに家内と本場のフランス料理を楽しむことが出来た。昼食後は腹ごなしをかねて、地図を頼りに徒歩でバンドーム広場のJCBプラザ・パリへ行き、今夜のセーヌ川デイクルーズの代金相当分をキャッシングした。それから昨日訪れた免税店付近を歩いて、オペラ座を見学した。

オペラ座は一八七五年に完成の客席数二二〇〇、一度に約四五〇人も出演出来る世界最大規模の劇場たつてである。丸天井に描かれたシャガールの『夢の花束』は、実に見事なもので、劇場の階段を初め、あちらこちらに豪華な裝飾が施され見応えがあつた。ついでにオペラ座近くのパリ三越へも寄つた。

帰りは地下鉄の入り口が判らず困つたが、オペラ駅からコンコルド駅乗換えてポルト・マイヨール駅へ着き、コンコルド・ラファイエット・ホテルへ戻つた。セーヌ川デイクルーズ参加組は、夕方六時四十五分にホテル一階フロントに集合し、送迎バスでクルーズ船発着所へ行った。

クルーズ船では、ライトアップされたルーヴル美術館、オルセー美術館、ノートルダム寺院、エッフェル塔などパリの夜景を楽しみながら、ディナー、ワイン、ビールを堪能した。船の外周は飛沫避けなのかどうかは判らないが、透明なヴィニール・シートで囲まれて暖かつたが、船橋(フ

リッジ)は気温が低く寒いくらいであった。照明も艶やかで、船内は時の経つにつれて賑やかに盛り上がった。

今日ロンドンからパリに着いて、このクルーズに直行・参加したという別のバック・ツアーの三重県出身の塾年夫婦と席が隣り合せて、旅の話に花が咲いた。このご主人はカメラマニアらしく、盛んに写真を撮って後日送ってくれた。

五月三日(火)快晴 十一日

海外旅行もいつの間にか、十一日が過ぎて早くも帰国の日が到来した。モーニングコール八時、荷物回収九時、チエックアウト十一時半、出発十二時四十分とわりにゆったりしたスケジュールであったが、私達夫婦は持てる時間を有効に活用すべく、今日も早起きしてホテル近くのポルト・マイヨー広場から片道約一キロメートルのグランド・アルメ通りを徒歩で往復することとし、シャルル・ド・ゴール・エトワール広場の凱旋門まで行った。大通りは交通が激しいので、凱旋門には大通り広場直下の地下道からアプローチすることになっており、エレベータで凱旋門の頂上に登った。

エレベータは登りだけ一人三十一フランス・フランかかるが、切符の売り場が地下だったことを知らず、最初その場所を探してウロウロしてしまった。折から素晴らしい快晴で、凱旋門頂上からパリ市内が三六〇度眺望できて満足した。

添乗員から今日は機内搭乗まで、昼食を取る機会がないと言われていたので、グランド・アルメ通りにあるパン屋に立ち寄り、長いフランスパンにハムや野菜をふんだんに挟んだサンドイッチを買い求めようとした。しかし、言葉が通じないためスタモンダしていたら親切な女子学生が

寄つて来て通訳をやってくれたので一件落着した。

彼女がいて本当に助かったのである。大きなサンドイッチは一個二二・五フランス・フラン(約四三〇円)であった。それから酒屋で一本八フランス・フラン(約一五二円)の缶ビールを三つ買った。家内と二人で舗道のベンチに腰掛けて、典型的なパリの町並みを眺めながら、今度は何時チャンスがあるのかな、また来る機会があればいいのになどと話しながら缶ビールを空けて、ホテルへ戻った。チエックアウトを済ませ、コンコルド・ラファイエット・ホテルをあとに専用バスでシャルル・ド・ゴール空港へ向かった。空港の免税店で土産の酒、口紅、クロスのボールペンなどを買い、残りのフランス・フランは円貨に交換して綺麗さっぱり外貨を処分した。

因みにレートは、一フランス・フラン当たり十七円二十銭であり、円への交換は千円札以上に限られている。ルフトハンザ・ドイツ航空の国内線でパリのシャルル・ド・ゴール空港を十四時四十分に出発して、フランクフルト空港に十六時着。今度はルフトハンザ・ドイツ航空の国際線で十六時五十分に出発してヨーロッパに別れを告げた。

機内では仲良くなった仲間と今度の旅の思い出語りに余念がなかった。母娘組は前にも来たことがあり旅慣れていた様だが、パリでの自由行動の日、買い物に行って地下鉄で危うく集団スリにやられかけたと言っていた。私達は機内に場慣れしたせいか、前にも増して厨房室に足しげく通い、ケーキ、ワイン、ウイスキー、ジュース、お茶、おむすびなどを飲んで食べて退屈さを凌いだ。テレビのディスプレイでは、日本では公開前の映画を二晩中流していた。

五月四日(水)曇り 十二日

成田国際空港に午前十一時十分無事到着した。ターミナル

ーブルでは、待つ間もなく自分のトランクが出て来たので、すぐ通関のところへ行ったが、検査官からトランクを開ける要請もなくパスして入国した。私達夫婦以外は、新婚さん、母娘、〇・三入組のいずれも女性の多い構成で、旅行中は買い物に余念がなく、土産を沢山持って来ており、なかなか通関から出てこなかった。

今回はプライベート旅行だったので、各国通貨をつまぐコントロールして、すべて使い切つて来たので、成田空港での円貨への両替はしないで済んだ。荷物は、割れ物を除き、〇・三入組に託送を依頼した。私達は身軽になつて帰途は空港バスで箱崎のTCAへ行ったが、車中で偶然添乗員とまた一緒になった。

彼女は気さくなチャキチャキの江戸っ子で、住居は箱崎に近いとのことだった。私達は箱崎に近い水天宮駅から半蔵門線経由田園都市線一本で効率良く帰った。こんなに長く家を空けたのは初めてで、連休を利用して留守番を頼んでいた娘夫婦も私達の無事の帰着を喜んでくれた。

旅は何処に行つても新しい発見があり、心を豊かにしてくれる。この旅の十二日間は天候にも恵まれ毎日が目新しい変化の連続で、息をつく間もないうちに終つてしまった。期せずして幸いにもバックツアーを手にした当初から、この旅は幸運に満ちていた。行動をともした添乗員はベテランでいい人だったし、ツアー仲間も気さくな人達ばかりであった。

当初良い旅になりそうと予感した通りに事がはこび、同行の皆さんには、とても感謝している。誰一人として病氣、盗難、事故に遭わず最後まで全員揃つて安全無事に帰国できたことは、これこそ今回の旅を総括して最高の『幸運その六』と言つても良いだろう。

私の生涯で初めての最長十二日間にあつた多くの幸運に恵まれ、最高の思い出となった。記念すべき還暦旅行の

記録をこの辺で閉じたいと思う。

多趣味人間やまとの世界